

令和6年度第1回「木曾悠久の森」管理委員会 議事概要【公表】 (案)

1 開催日時 及び場所	令和6年12月4日(水) 13:15~15:35 木曾森林管理署
2 出席委員 (五十音順) (敬称略)	飯尾 歩 (中日新聞社 論説委員) 池田 聡寿 (池田木材(株) 代表取締役社長) 大浦 由美 (和歌山大学観光学部 教授) 大住 克博 (鳥取大学農学部 名誉教授) 大屋 誠 (上松町長) 岡野 哲郎 (信州大学農学部 教授) 下嶋 聖 (東京農業大学地域環境科学部 准教授) 早川 正人 (付知町まちづくり協議会 会長) 藤森 秀彦 (信濃毎日新聞社 編集委員) 正木 隆 ((国研) 森林研究・整備機構 森林総合研究所 研究リスク管理監) 山本 博一 (東京大学 名誉教授) 横山 隆一 ((公財) 日本自然保護協会 参与) 安江 博之 (中津川市 農林部 林業振興課長 ※中津川市長代理) (13名)
3 議事及び 概要	<p>議事1 特殊用材の需要・要望を踏まえた伐採計画案について(資料1)</p> <p>「木曾悠久の森」エリア内で特殊用材を伐採することについての意見聴取。 ※ 管理委員会に先立ち開催した合同専門部会では、本件について質疑応答はあったものの特段の意見等はなかった。</p> <p>(委員からの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特段の意見等なし。 <p>(座長による総括)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出席委員全員の同意により、伐採計画案は適当と判断。 <p>議事2 特殊用材の需要・要望に対する対応手順について(資料2)</p> <p>平成28年度の管理委員会で認められた、特殊用材の需要・要望があった場合の対応・検討に係るフローチャートについて、国民的な伝統行事の考え方とともに修正を提案。</p> <p>(委員からの意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・案の中段3つ目に「木曾ヒノキ等の資源の持続性」とあるが、「木曾悠久の森」は資源の問題ではなくて、生態系の持続と復元が主旨。温帯性針葉樹林の生態系復元あるいは復元への影響を基準として考えるべきであり、資源の持続性よりも生態系あるいは生態系復元への影響と記載すべき。 ・国民的伝統行事についての整理は良いと思われるが、その後の「国宝・重要文化財等歴史的・文化的建造物の修復等に必要とされる…」の文言が曖昧である。国宝や重要文化財は多数存在するため、これらへの供給については限定的に考えるべき。 ・現行のフローチャートの方が丁寧で分かりやすく感じる。「地元業界等による製品供給」の記載をなくさないでほしい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・フローチャートが誰の視点で見られるように作られているかが重要。プロセスのどの部分で誰が関わるか、管理委員会がどの部分で関わるのかというところが見えれば良い。 ・現行のフローチャートを作ったときは、局としての判断のプロセスを記載したうえで、管理委員会の関わり方を入れこむという、2つの観点で作成した。また、ここで言う「資源の持続性」は、高齢級自然木の資源の持続性のことを指すのではないか。過去に、高齢級の自然木を把握するための毎木調査をする時期が来ているのではという議論をしている。本日の委員会での意見を全部組み込んで、再度事務局より提案をされたらどうか。 ・高齢級の大木の毎木調査や、いずれ大径木となる候補木の成長のモニタリング等をしていかなければ、将来の木曾ヒノキの供給の可能性を計ることができない。それが分からない以上は、伐採計画が委員会で諮られた際に持続性の判断もできず、ひいては「木曾悠久の森」の復元の取組にどう影響を与えるかも計ることができないのではないか。 ・フローチャートは、森林管理局で扱う全体と、その中でこの委員会が関わる部分が見えるように示していただければどうか。 <p>(座長による総括)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・議事2は、事務局にて整理のうえ改めて提案をされたい。 ※後日、別添「資料2」により管理委員全員の承認をいただいた。
	<p>議事3 「木曾悠久の森」における危険木の取扱要領について</p> <p>一般の者の入林が想定される区域内における危険木発生時の対応を迅速化する観点から、プロセスの簡略化を提案。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「一般の入林者が想定される区域内(赤沢自然休養林内)において・・・」として、対象となる区域を明確にしてはどうか。 <p>(座長による総括)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・提案の一部修正(区域について分かりやすく記載)をする前提で承認。 ※後日、別添「資料3」により管理委員全員の確認をいただいた。
4 その他	<p>事務局からの説明事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「木曾悠久の森」の設定から10年を迎えたことを踏まえ、令和7年2月20日に上松町において、シンポジウムを開催する予定。 ・3つある専門部会のうちの森林資源利用部会と森林総合利用・地域振興専門部会について、今後、管理委員会の場で関連する内容の意見聴取を行うことが可能と考え、この2部会を一旦閉じたい考え。 ・植生管理専門部会については、復元のための森林施業の方法、モニタリング調査の進め方など、有識者から意見や助言を引き続き頂きながら進めていくことが必要なことから、継続としたい考え。ただし、林野庁長官通知との整合の観点から、保護林の復元部会の委員として委嘱を行って、取組を進めていくこととしたい。 ・委嘱期間が10年を超えた委員の交替について、今後検討していく予定。 <p>(委員からの意見)</p>

・「木曾悠久の森」は木曾五木を含むコアエリア、特に人工林の多い区域にコアBを作った意図は、人工林から木曾五木を含む自然林に復元することを徹底的にやっていくということである。本来は、ワークショップやセミナー等を行いつつ、それぞれの部会を活用しながら復元の取組を進めることを期待していたが、それができなかった。

・今までの役所のやり方では作れなかったものを作ることができる委員会の構造に再編していただきたい。技術や手法が分からないことにチャレンジするために「木曾悠久の森」を設定したものと思っている。そのような認識をもう一度思い出すべく、委員会の再編だけではなく、現行の管理基本計画の改定もセットで行うべきではないか。

・この委員会において復元に本気で関わった記憶はなく、むしろ諮問委員会的に関わってきた印象を持っている。まず我々は何をすべきか分からないところもあるので、モニタリングや老齢のヒノキ林が他に成立している箇所との比較・分析を行い、確立に向けた計画が必要ではないか。我々が持つ既存の技術をどう組み合わせたら実現可能なのか、あるいは何が足りないのか検証する作業が必要と考える。そのような作業に関わる委員の交替については、柔軟な対応をお願いしたい。

・この先 200 年、300 年、「木曾悠久の森」をどうしていくべきか、誰にも分かっていないことであるが議論はほとんどされてこなかった。管理委員会の設置の準備段階では、局の幹部の方々と現地に集まり、議論や現地確認を繰り返しながら方針を決めたりした経緯もある。温帯性針葉樹林あるいは大規模な生態系の復元というのは、今でも教科書に書かれていないインターネットを見ても無い。Web を活用して 30 分でも 1 時間でも簡単に勉強会を開催できる時代なので、今後は局の方々と委員とでオンラインで意見交換もしつつ、対面で集まる機会には現地で議論できるような形でやっていくと良い。

・シンポジウムについて、過去のことを知らせるだけだとメッセージ性が弱くなるので、メッセージ性の強いものにし、一般の方々に森林に興味を持ってもらえるようにすべく、「答えの出ていないものに木曾で取り組もうとしている。それをやる理由は生物多様性保全であり、日本や世界がこのような状況に直面している」といった、我々が目指すものを強くアピールできる内容にしてほしい。

・今後の委員会ではビジョンを明確にしつつ、Plan-Do-See により基本方針を定期的に確認し、本来の目的が何であるのかを常に分かる形で運営していただきたい。要領等の改訂をする際は解説や説明を付せば、関わる者が替わっても事業と本来の目的とのつながりが担保された状態が継続できるのではないかと。

・伊勢神宮の宮域林は 100 年を経過し多様性がある混交林を目指し、素晴らしい森づくりをしている。「木曾悠久の森」も後進に宝物を残していくというような思いで、取り組んでいただければと思う。

・10 年を機に委員会の役割や権限の縮小に向かうような印象を持っている。区切りとなるシンポジウムは、新たなステップになるような場にしていただきたい。

・悠久の森を目指すことは、ある意味それ自体がステータスであるとも思うので、これまでの過程やポイントを宣伝していても良いのでは、と考える。また、木曾悠久の森の区域内で、伊勢湾台風による風倒のような、大規模な自然災害があった際の対処を、それらを資源として活用するのか等を含め、予め検討しておくことも課題の一つと考える。

・「木曾悠久の森」の設定により、木曾ヒノキという非常に重要な資源を生産できる区域が大きく制限されたにもかかわらず、地元の関係者を含めて合意がなされたことは素晴らしいことである。地元の方々の思いが「木曾悠久の森」には込められていると捉えており、今後、復元に向けた取組だけでなく、地元と協力・連携する仕組み等を考えていければ良い。

－以 上－